後藤正治
メジロマックイーン伝説

阿部珠樹
ナベ正と呼ばれた男

広見直樹
ライデンの夢

木村幸治
善哉、牧野に死す

井口民樹
ブルボンの蹄音

宇都宮直子
駆けてゆく女性たちへ

山本徹美
阪神競馬
再開までの300日

辻谷秋人
ジャパンカップにかけた
馬と男たち

吉沢譲治
0秒0。運命の写真判定

競馬人

傑作
ノンフィクション集

NEBRA

フィクション集

競馬人

広見直樹
木村幸治
井口民樹
宇都宮直子
山本徹美
辻谷秋人
吉沢譲治

有朋社

傑作ノンフィクション集　競馬人

1997年12月21日　第1刷発行

著　者　後藤正治　阿部珠樹　広見直樹
木村幸治　井口民樹　宇都宮直子
山本徹美　辻谷秋人　吉沢譲治

発行者　齋木　勉

発行所　株式会社有朋社
〒104 東京都中央区京橋3-3-10

電　話　販売 (03)3231-5011
編集 (03)3272-8866

印刷・製本所　大日本印刷株式会社

©後藤正治　阿部珠樹　広見直樹　木村幸治
井口民樹　宇都宮直子　山本徹美　辻谷秋人
吉沢譲治　1997 Printed in Japan
ISBN4-946376-34-8
定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

目

次

メジロマックイーン伝説——**後藤正治** 7
ナベ正（しょう）と呼ばれた男——**阿部珠樹** 29
ライデンの夢——**広見直樹** 49
善哉、牧野に死す——**木村幸治** 89
ブルボンの蹄音——**井口民樹** 111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

駆けてゆく女性たち へ——宇都宮直子 133
阪神競馬 再開までの300日——山本徹美 155
ジャパンカップにかけた馬と男たち——辻谷秋人 197
0秒0。運命の写真判定——吉沢譲治 221
著者紹介 254

装丁　上田宏志＋ゼブラ

競馬人

傑作ノンフィクション集

メジロマックイーン伝説

後藤正治

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

対決

グキッ、という鈍い音だった。

パドックから本馬場に出て、馬がゆっくりと駆け出していく、その第一完歩目だった。場内に流れる音楽と、十万人を超す観衆の包み込むようなざわめきのなかで、メジロマックイーンの厩務員・早川清隆の耳は、その小さな音をひろった。前脚と後脚の蹄鉄が接触した音のように思えた。めったにないことである。

彼がその音を聞き逃さなかったこと。それが、〝夢の対決〟の明暗にかかわりあるものであったかどうかは不明である。ただ、結果次第では、その小さなアクシデントが、レース結果を左右した要因のひとつとしてささやかれることになったかもしれない。

一九九二年四月二十六日、京都・淀競馬場。第百五回天皇賞。距離三千二百メートル。秋の天皇賞が距離二千メートルに短縮されて以降、春の天皇賞こそ、五歳以上の古馬ステイヤー（長距離馬）が実力日本一を賭ける舞台となった。

この年春の天皇賞は、かつてなくマスコミの俎上をにぎわせた。メジロマックイーンとトウカイテ

イオーの初対戦を指して、〝夢の対決〟として取り上げたのである。一般紙はもとより、ＮＨＫまで競馬の話題を放映するのは異例のことであろう。

メジロマックイーンは、牡六歳、栗東・池江泰郎厩舎。四歳の秋に彗星のように現れ、菊花賞馬となった。父メジロティターン、祖父メジロアサマは共に天皇賞馬であり、自身も前年五歳の春、天皇賞を制して父系三代の天皇賞制覇を果たしている。その後、宝塚記念（二着）、京都大賞典（一着）、秋の天皇賞（降着になるも先頭でゴール）、有馬記念（二着）、六歳になって阪神大賞典（一着）と、常に安定したレース運びで古馬第一人者の地位を揺るぎないものとしていた。

一方のトウカイテイオー。牡五歳、栗東・松元省一厩舎。この時点まで、七戦七勝の無敗である。四歳時に皐月賞、ダービーを勝つ。その後、左後脚の骨折による長期休養に入ったが、五歳になって産経大阪杯を圧勝、〝帝王〟という名に相応しい走りっぷりを見せつけた。父は、史上最強馬とうたわれたシンボリルドルフである。

鞍上は、メジロマックイーンに武豊、トウカイテイオーに岡部幸雄と、東西を代表するトップジョッキーである。実績、舞台からして〝夢の対決〟も、あながち誇大文句ではなかった。

レースの帰趨は定かではなかったが、マスコミ報道のウエートは、どちらかといえばトウカイテイオーにあったろう。無敗という成績が、この馬のいまだ底が見えない魅力を醸し出していた。

調教師の池江泰郎は、キャリアの差が出てくれれば、と思っていた。マックイーンがすでに三千メートル以上を五度経験しているのに対し、トウカイテイオーは未経験である。ただ、池江もトウカイテイオーの力量を計りかねていた。

不安がよぎると、〈いや、マックイーンに裏切られたことは一度もない〉と思い返した。この点が、池江厩舎にいた兄のメジロデュレンとの違いだった。

菊花賞、有馬記念を制したメジロデュレンは、池江厩舎がもったはじめてのGⅠホースである。繁殖牝馬メジロオーロラの一番仔がメジロデュレン（父フィディオン）で、五番目の仔がメジロマックイーンである。

デュレンは大駆けもしたかわりに、むらもあった。調整とレースの答えが結びつかないことがままあった。マックイーンはそういうことが一度もない。常に安定した走りがマックイーンという馬の特徴であり、秀でた点だった。

早川は、マックイーンの同時代に無敗の馬は見たくない、と思っていた。それだけマックイーンの力を信じていたわけだが、〈無敗なんておもしろくないやん〉という想いが強かった。マックイーンが負けたレースがある。悔しさに震えたこともある。が、人も馬も、負けてこそ発奮するのではないか。そこにまた人生の味もある、と。

本馬場に出て、キャンターに移りながら、鞍上の武もまた、蹄がカチンと当たったことに気がついていた。集合合図がかかり、出走ゲートの近くに馬を寄せながら、近くにいた係員に、「ちょっと蹄鉄を見てくれませんか」といった。係員からは、「鉄はちゃんと着いてますよ」という答えが返ってきた。

もう出走時間が迫っている。そこへ早川がやってきた。彼が見つけた。右前脚の蹄鉄が、三分の一

ほど欠け落ちているのである。
場内のアナウンスが、メジロマックイーンの蹄鉄を打ち換えることを告げると、場内は大きくざわめいた。
気勢をそがれるという意味で、不吉な出来事であったかもしれない。けれども、早川は、〈これもマックイーンの運だ〉と思った。万にひとつの出来事が起き、さらにそれを事前に発見できるのもそうそうあることではない。
――四コーナーを回った地点で、マックイーンは先頭に立った。好位で四角を回り、末脚を伸ばして押し切ってしまうのがマックイーンの勝ちパターンである。
武はレース前から自信があった。パドックでマックイーンに跨がると、弾けるような手応えが返ってくる。好調時のしるしである。四角を回り切ったとき、勝利を確信した。
池江は双眼鏡でトウカイテイオーを追っていた。三コーナーの坂を下りながら、トウカイテイオーが差を詰めてくる。ゾクッとしたものが突き上げてきた。さあ、ここからが勝負だ！　が、それも一瞬だった。トウカイテイオーが直線に入って伸びない。岡部の鞭が飛ぶが、後ろからきた馬にもかわされていく。帝王がゴール板を通過したのは五番目だった。
早川は、他の厩務員たちと一緒に、馬場の障害コースの内側にいた。ゴール板は見えない。ゴールを過ぎて、武が、右手を突き上げ、ステッキを大きく振り上げた動作によって、愛馬の勝利を知った。にわかに目頭が熱くなった。そういう質（たち）だった。大一番になって、マックイーンが勝つといつもそうなってしまう。涙を見せぬよう、彼はそっと横を向いた。

遺訓

北海道虻田郡洞爺村。北に蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山を望む大地に、六十二町歩に及ぶメジロ牧場がある。オーナーは、今年八十三歳になる北野ミヤである。

メジロ牧場は、競走馬を自ら牧場で育成しながら競馬に出すオーナーブリーダーである。一九七〇年代以降、数多くの優駿を出してきたことはよく知られていよう。

場長の武田茂男は、温厚な人柄の人物である。もともとは獣医で、新潟競馬場に勤務していた頃、メジロ牧場創設者の北野豊吉（故人）に請われて、この牧場にやってきた。メジロ牧場が開設されて三年目、一九七四年のことである。

競走馬は血で走る。どの種牡馬にどの繁殖牝馬をかけ合わせるか。名馬誕生のもとをたどれば、武田が毎年、あれかこれかと悩みながら配合を考え、脳裏に描く新馬のイメージまで辿り着くことになろう。

ダービー獲得こそすべてのホースマンが夢見る目標であるが、メジロ牧場はやや異なるポリシーをもっている。比重を天皇賞を目標にしたステイヤー育成に置いている点である。それは、競走馬の獲得賞金によって牧場経営を維持するオーナーブリーダーであることと、北野豊吉の遺訓からである。

「豊吉ツアンは、ダービーよりも天皇賞を大事に考えていましたね。なんたって明治の男でしょ。だから天皇陛下の賞ということに特別の思い入れがあったんでしょうね、きっと」

未亡人となったミヤの回想である。

メジロティターンで三代の天皇賞馬をつくってくれ――というのが、豊吉が急死した前日、ミヤたちにいい残した言葉であった。父系三代の天皇賞馬が生まれたのは偶然ではない。

メジロ牧場からは、年に平均三十頭の馬が生産されている。うち二十頭は、伊達にあるメジロ繁殖牧場で、残り十頭は、各地に仔わけされた牧場で繁殖される。メジロマックイーンは、仔わけ組の一頭で、浦河町にある吉田堅牧場で誕生した馬だった。

誕生から約半年して、仔馬たちが洞爺のメジロ牧場に集められてくる。以降三歳まで、牧場にあるさまざまな施設を使いながら、競走馬としての訓練を施し、各厩舎に送り出すまでを牧場が担当する。

武田によれば、「走らない馬はほぼわかるが、走る馬はわからない」という。「走る馬を作ろうとしていながら、作り切れるもんじゃないです」ともいう。

血統をたどり、配合し、訓練を施し、ベストの状態で送り出してもなお、そこに人為を超えた部分がある。血統だけで説明できるなら、名馬の全兄弟は必ず走らなければならないわけだが、そうとは限らない。サラブレッドの血はそれだけ奥深い。

メジロマックイーンがメジロ牧場から巣立っていった年は、牧場にとっても空前の豊作年――というのは後になって判明したわけだが――だった。何しろ、マックイーンに加えて、メジロライアン(宝塚記念一着、ダービー二着など)、メジロパーマー(有馬記念一着、宝塚記念一着など)という三頭のGI馬を送り出したのであるから。

二歳、三歳時のマックイーンは、利口で、バランスのいい馬だった。武田は、ひょっとしたら重賞

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com